

らずでも言わんとしていることがとてもよく伝わる文章もあった。実践③でできあがった生徒の文章の中には、誤字脱字もなく文のねじれもない、すらすらと読める文章であるのだが、何か心が伝わってこない、味気ない文章ということがあった。読みやすい文章と心をうたれる文章は別であると言えるのかもしれない。表記的な事項を生徒に指導すれば、生徒達は学習し、獲得していく。しかし、そのような学習活動であると、生徒の興味関心は高まらないことが多い。心を伝えることに方法論はあるのであろうかと思った。

#### 【課題】

・書き上げた文章の評価観点を整理する必要がある。書く活動を通してつける力は系統的に整理したが、実際の文章で、学年別の到達課題を今後整理する必要がある。

・仮説(B)における書く手順の見直しが必要である。書き方を画一的にすると、生徒の自由な発想を妨げるおそれがあるからである。

書くことについての基礎・基本を考えた時、原稿用紙の使い方をはじめ、接続詞の正しい使い方、誤字脱字の確認を含めた推敲の仕方等は、生徒に学ばせたいことである。今回は、説明的文章ではなく、自由な発想で書くことのできる文種であったが、論文や説明文を書くこととすれば、この基礎・基本は大切になってくる。このような文

種を扱う学習活動で、いかに生徒の書く意欲を喚起させるかが、次の課題となった。

## 「実践研究記録」を読んで

高橋 弘

### 一

本学に国語国文学会が結成されたのは昭和五十六年十月、その会誌『国語国文学』の創刊号が出されたのが、昭和五十七年三月のことであった。以後毎年一回ずつ『国語国文学』は刊行され、今回は第二十一号になる。年数から見れば、成人式を済ませ大人の仲間入りをした会誌ということになる。

本学が最初の卒業生を送り出したのは昭和五十一年三月。この間、国語を専攻・専修して卒業していった人は、本年度の卒業生を含めて千七百名余り。現在も全国各地の学校現場で活躍しているかつての本学国語国文学会員の人は、相当な数にのぼるのではないかと

思われる。現会員の皆さんは、近い将来、学校の教師になりたいという希望を持った人達ばかり。自分たちの先輩が、今学校現場で、特に国語科教育について、どのような実践に取り組んでいるのかを知ることが有意義なことを考え、最近では学会誌に毎号一点ずつの「実践研究記録」を掲載し始めている。

今のところ、比較的情報の得易い岐阜県内で活躍している人達の実践記録を紹介しているが、今後はこれを全国的に広げていけたらと願っている。

## 二

今回紹介するのは、岐阜市立東長良中学校教諭の加藤大志さんの実践研究記録「適切に表現する力の高まりを求める国語科学習——書くことを通して育む言語能力の高まり——」である。

加藤さんは平成五年度の本学卒業生。恵那郡川上中、羽島郡笠松中勤務を経て、平成十二年四月より現在校での勤務となっている。本年度は、岐阜県中学校国語研究会（略称・県中国研）の「読むこと部会」の部長にも推され、前途の一層の活躍が期待されている青年教師である。

加藤さんの取り組んだ実践研究は、所属する東長良中国語部としての包括的研究主題「適切に表現する力の高まりを求める国語科学習」に「書くことを通して」迫ってみようとしたものである。その

実践、研究は緒に就いた段階にあるようだが、記録を読ませてもらった限りにおいて、注目すべき幾つかの点を挙げてみたい。

### (一) 今日の課題としての実践研究主題

1. 「国語を適切に表現する」力は、学習指導要領国語の目標の最初に出てくることばである。最初に取り上げられているということは、国語の学習指導の中でも重視されている能力と考えてよい。またその表現力を「書くことを通して」育成していこうとすると、学習指導要領に「指導に配当する授業時数の国語科の授業時数に対する割合は、各学年とも一〇分の二〜一〇分の三程度とすること」と、割合が示してある「話すこと・聞くこと」「書写」に比べて、その割合が大きいことも、書くことによる表現力の育成が重視されていることを示している。

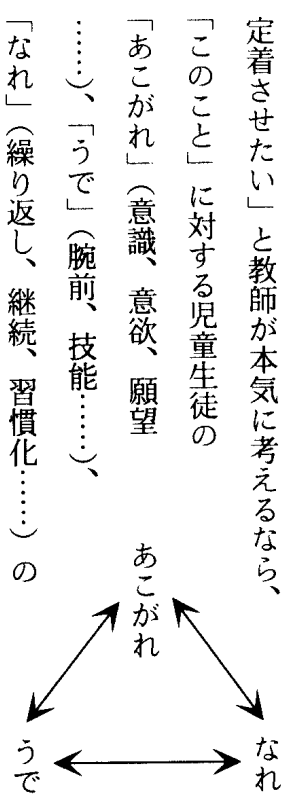
2. 表現力育成重視の方向が示されているにもかかわらず、加藤さんが指摘するように、教室で目の前にいる生徒たちには、「書くことはなんとなく苦手だ」「文章を書く」と聞いただけで抵抗感をもつ「書くのは面倒だ」などという意識の生徒が大多数を占めている実態がある。こうした実態から出発し、「文章を書くことについて抵抗感をもたない生徒」「伝えたい内容を的確に相手に伝えるために、言葉や文章を

吟味することができる生徒」へ高めて行こうとする実践、研究は今日的課題としてふさわしいものである。

(二) 研究仮説としての「意欲を促すテーマの設定」、「書く場の繰り返し設定」

加藤さんは、実践研究を進めるに当たって、まず、一四五ページの二重線で囲われた枠内にA、B、C三つの「研究仮説」を立てている。どの項目も、なるほどと思わせる内容であるが、わたしが特に注目したのは、「意欲」と「繰り返し」への着眼である。

「このことについては、児童生徒の身に、確実に力として定着させたい」と教師が本気に考えるなら、



でき、意を強くしている。

(三) 単元学習計画の中に位置付く「書くこと」の活動

加藤さんの記録の「研究の実践」の項に、「仮説(A)にかかわった実践として「スピーチを行うためのスピーチ原稿づくり」が報告されている。(一四七ページ)

その最初の部分に、単元指導計画略案が枠囲いで載せてあるが、それを見ると、皆さんが記憶に留めている中学校の作文の授業にはなかったような学習活動が展開され、「こういう学習ならおもしろそうだな」と興味を引かれ、「やってみようか」と、意欲もかき立てられるのではないだろうか。

先生が、いきなり「君たちも二年生になった。もうそろそろ、卒業後自分がどんな方向へ進もうと考えるか、はっきりさせるのがいい。そこで『私の進む道』という主題で作文を書いてもらおうと思う。」ということで作文を書くのではない。加藤さんの場合、学習のスタートは、「遠くでっかい世界」という教材との出会いである。まず「言語事項」にかかわる学習があって、教材の内容理解、その理解した内容にかかわって、生徒一人一人が、自分の「大志」についてスピーチを行う。そのためには、前以て自分の大志について、スピーチ原稿を書く、という位置付けになっている。

自分の思い、考えを「書くこと」によって表現するという学習は、エッセイを読んで内容を理解する「読むこと」の学習とつながり、スピーチをして自分の大志を学級のなかまに理解してもらおう、みんなのスピーチからなかまの大志を理解するという「話すこと・聞くこと」の学習とつながり、また、それぞれの学習活動は、必然的なつながりを持って展開されて行くのである。

この四月からは、小・中学校とも新しい学習指導要領に基づいて編集された新しい教科書を使用することになるが、皆さんも、特に中学校の新教科書を手にしたら、まず「目次」に目を通して「単元」というひとかたまりの学習内容の全容をつかみ、次いで具体的な一つ一つの教材と、単元内の相互のかかわりをつかんでみてほしい。そうした後で、もう一度加藤さんの実践例を読み返してみると、理解が深まるのではないかと思う。